

---

# ポケットモンスター ～お嬢様とレックウザ～

まどろみ猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター ～お嬢様とレックウザ～

### 【Nコード】

N4861Z

### 【作者名】

まどろみ猫

### 【あらすじ】

無気力・無表情なお嬢様の、十六歳の誕生日。仕事で滅多に屋敷に帰ってこない父から送られてきた誕生日プレゼントは、伝説のポケモン・レックウザだった！？ポケモンを持ったことなどないお嬢様、自分には資格がないと逃がそうとするが、人語を理解するどころか話すこともできるレックウザに気に入られてしまい…！？

自分の生きることの意味を見いだせなかったお嬢様が、人と触れ合い命の大切さを学んでいく。ポケモンと人は、どのような関係であることが理想なのか？生きる意味は見つかるのか？

ジヨウト地方での、知られざる少女の成長の物語。

## 誕生日（前書き）

ポケモンで、書きたいと願ってありましたまどろみ猫です。夢が叶って嬉しいです。

私は少しでも上達したいので、よろしかったら感想やアドバイスをお願いします。厳しいコメントも、自らの糧としていきたいと思っております。が、登場人物に対する批判はおやめください。

至らぬ点は多々あると思いますが、よろしかったらご覧ください！

## 誕生日

私の名前はカノン。自分で言うのも何だが、お嬢様だ。…外見は、そうは見えないだろうけど。

私の住んでいるジョウト地方は、なかなか住みやすい地方らしいらしいというのは、私はこの地方はおるか、自宅である屋敷からも滅多に出ないからだ。

出でることなどないし、したいこともない。だから、毎日の学習を終えると無意味に時間を潰す。昼寝をしたり本を読んだりピアノを弾いたりテレビを観たり…だらだらと、時間が過ぎていく。

両親もいない、友達もいない、ポケモンも持っていない私の話し相手は、屋敷で働くメイドさん達くらい。まあ、話すこともないけど。

「お嬢様。旦那様から、小包が届きました」

春の、日差しの心地よい午後。ソファに寝そべって惰眠を貪っていた私は、主であるパパに代わって屋敷を管理している万能執事・ラストの声に目を覚ました。

「…ラスト。仮にも十五歳のレディの部屋に、ノックもなしで入ってくるなんて無礼じゃなくて？」

眠い目を擦りながら、一応抗議する。

「ノックをしても、お返事がなかったもので。…それに、お嬢様はまだまだ子供ですよ」

ふふふつと含みのある笑い方。明らかに、私の発育を笑っている。…まな板じゃ、子供扱いされてもしょうがないか。特に怒りもせず、手を差し出す。

「そうね。私は子供ね。…パパから便りがあるなんて、珍しいわ」  
頂戴と、差し出した手。恭しく渡されたのは、綺麗にラッピングされた小さな箱。

「何かしら？…あら、カードがついてる」

広げて、声に出して読む。ラストも、内容が気になるだろうから。「何々…カノン、誕生日おめでとう！十六歳になったカノンに、パパからプレゼントだ！きつと驚くぞ！カノンの誕生日を祝えないのが残念だが、パパはいつでもカノンのことを想ってるぞ！帰る日ができたら、連絡するからな！」…ああ、今日は私の誕生日だったの？」

読み上げてから、ソファの横で控えるラストに訊く。

「…お嬢様、ご自分の誕生日をお忘れにならないでください」

心底呆れた顔のラスト。若いが無能なこの執事、顔までいいのだから、よほど神様に愛されている。

ただラストにとって不運だったのは、敬愛する主人に仕えることができず、私のような娘の面倒を見なくてはいけなかったことだ。

「私の生まれた日に、何か意味があるの？」

生まれてきた日に、生まれたことに、何の意味があるというの？

「…お嬢様、旦那様が悲しまれますよ」

私の言葉の意味を察してか、ラストは眉をひそめた。でも、それもどうでもいい。

そう、すべてがどうでもいい。私は何の為に生きているのか、わからずただ生きているだけなのだ。

無意味に、無気力に。ただ、生きるだけ。

「…旦那様からのプレゼント、ご覧にならないのですか？」

ごろん、とまたソファに寝転がった私。そのまま微睡むつもりだったのだが、ラストの声に妨害された。

「どうやら、『私が驚く』プレゼントに、興味があるらしい。」

「ラスト、見たい？」

箱を渡そうとすると、首を振られた。私へのプレゼントなのだから、私が開けなくてはいけないのだそうだ。

「…わかった。開けるわね」

普段無表情の私が、驚くものとはなんだろうか？

「これは…モンスターボール？」

小さな箱に入っていたのは、見慣れた物体だった。ただし、変わった色の。

「紫色のボール…パパがいる地方では、これが普通なのかしら？」  
そつと持ち上げてみる。意外にも重い。

「ねえラスト。Wの文字があるわ…つてどうしたの？」

隣にいたラストは、食い入るようにそのボールを見つめていた。  
と思つたら、その目が輝きだす。

「これはっ！マスターボールですよお嬢様！」

「マスターボール…ポケモンを必ず捕獲できるという、幻のボール？」

トレーナーではない私だが、知識はある。この万能執事に叩きこまれた知識が。

「さすが旦那様！お嬢様の為にこんな希少なボールを入手されるとは！」

ラストが興奮し始めた。冷静沈着な彼は、パパが絡むと豹変する。  
「でも、このボール未使用なのかしら？」

振つても、音はしない。それはそうか。

「それに、私ポケモンをゲットしたりはしないし…ラスト、あげる」  
渡すと、ポップがタネマシンガンを食らったような顔をするラスト。  
と思つたら、狼狽して突っ返してきた。

「だ、だめですよお嬢様！これは、旦那様からのプレゼントなので  
すから！」

優秀なトレーナーでもある彼なら、有効に使つてくれると思つた  
のだが…。

「そ、そうです！マスターボールがプレゼントだとは思いますが、  
一応中身を調べなくては！」

…素直に、受け取ればいいのに。私は、要らないのだから。

屋敷には、ポケモン転送装置がある。一般家庭にはまずないが、

パパがお仕事で使っているのだ。

使ったことがないので、ラスタに操作してもらおう。慣れた指捌きでキーボードを打つと、装置に紫色のボールをセットした。

「中にポケモンが入っていたら、画面に名前と姿が表示されます。

…楽しみですね」

につこり微笑みかけてくるラスタ。子供みたいだ。

「…では、お願い」

「はい！」

たたたたと、彼の長い指が素早く動いた。そして、画面に表示されたのは…

「…レックウザ。伝説の、ドラゴンポケモン？」

「…お嬢様！もつと驚いてくださいよおおおおおっ！」

まったく表情を変えない私に、ラスタがツッコむ。

「レ、レックウザですよ！？ハウエン地方で語り伝えられる、幻のポケモンですよ！？」

ラスタ、驚いてるわと思いつつ、こくりと頷く。

「知っているわ。読んだ本に壁画が載っていて、こんな風だったわ」

画面を指差す。長い筒状の鮮やかな緑の身体、二本の鋭い爪のついた手、これまた鋭い牙が生えた口。

「パパ、ハウエン地方にいるのかしら？」

「そこじゃないですよお嬢様」

平静を取り戻したラスタに突っ込まれる。

「…それにしても、まさかレックウザとは…さすがです旦那様！このラスタ、一生ついていきます！」

…まだ混乱しているようだ。

「…ラスタ、ついてきてくれる？お庭で、レックウザをボールから出したいのだけれど…」

こんな状態の彼では正直頼りないが、屋敷で一番ポケモンの扱いに長けているのも彼なので、同行を頼む。

「…へっ！？レックウザを、ボールから出す！？」



∴それから、小一時間お説教が始まった。

## 誕生日（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございます！

え、なぜにレックウザ？と尋ねられれば、好きだからとしかお答えできません。可愛いですよレックウザ！

シリアス、ほのぼの、ギャグ、冒険、友情、恋愛…これらの要素を含めて、頑張りたいです。

他の作品も投稿していますので、よろしかったら…その、そちらも…どうぞ。

## レックウザはお怒りのようです(前書き)

お気に入り登録してくださった方がいらっしやっただようで、驚きました。ありがとうございます!…でも、その…よろしかったら、今後の精進のために感想を頂きたいな、と…。お願いします!上達したいのです私!

今回で、ようやくレックウザが登場します。…氷技で一撃、なんて言わないでくださいよ!?弱点がないポケモンなんて、悪&ゴーストタイプだけです!

## レックウザはお怒りのようです

「よろしいですかお嬢様？伝説のポケモンとは、他のポケモンとは一線を画した存在なのです。その能力たるや凄まじく、天災を引き起こしたりもします。ポケモンをお持ちになつていないお嬢様が、このレックウザを従えるのは、不可能でしょう。なぜなら……」

口をはさむ隙がない。かれこれ一時間は話し続けている。

「……ですから、レックウザをボールから出すのは、旦那様がお帰りになったときでなくては。暴走した場合、このお屋敷は壊滅し、辺り一面は火の海になるでしょう。旦那様は、私など比較にならないほど優れたトレーナーでもあられません。その日まで待つて……」

「……やだ」

呟くと、ラストの説教じみた説得は中断された。

「……お嬢様？」

「パパがいつ帰って来るかもわからないのに、ずっとこのレックウザを閉じ込めておくの？私はこのレックウザを逃がしたい。このレックウザも、そう思ってるはずよ」

紫色のボール。人からすれば夢のようなこのボールは、ポケモンからすれば悪夢のようなボールだろう。

投げられたら、そこでお終い。パパがこのレックウザとバトルしたのかは知らないけれど、どれだけ悔しかっただろうか。

抗っても、強制的に押さえつけられ、捕獲される。そんなのは。

「……ラスト、教えてくれたわよね。ポケモンと人は、主従の関係ではなく、対等なのだ。お互いを認め合い、歩み寄り、協力するのが真の姿だと。……嘘じゃないわよね？」

ポケモンの優れた力を、道具とみなし利用する人もいる。それは、知っている。

「……私は、このレックウザと対等になれるような人間じゃないの。トレーナーとしてどこるか、人としても欠けている私には。だから

…」  
勝手なことを言っているのは、わかっている。パパは私の為にこのレックウザを捕獲し、私は私の考えでこのレックウザを逃がそうとしている。

私達親子の都合に振り回されるレックウザからしてみれば、たまたたものではないだろう。

「…お嬢様」

顔を上げると、ラストが辛そうな顔をしていた。何で？

「わかりました。このラスト、お嬢様のお心のままに」

一礼すると、ラストは私の手を取った。

「…ご安心ください。お嬢様は、私がお守りします」

庭へと向かう彼に手を引かれている私は、その背中ににじむ覚悟に、罪悪感と感謝の念を抱いた…。

屋敷の使用人を全員避難させ、敷地内にいるのは私とラストと、彼のポケモン達だけ。

「…さあ、お嬢様。ボールを投げてください」

緊張に顔を強張らせた彼。その隣で闘志まんまんな、彼のライチユウ。

「…ごめんなさい。ラスト」

こんなの、執事の仕事じゃない。命を懸けてまで、彼が私に付き合うことはない。

私一人なら、どうなったってかまわない。でも、彼は違うはずだ。彼を必要としている人は、確かにいる。

謝ってすむことではないけれど、謝罪の言葉が勝手に出ていた。

驚きに目を見開く彼を横目に、ボールを投げる。…全然とばない。数メートルの距離に落下したボールから、かっと光が発せられる。

「ぐおおおおおおおおおおおん！！」

轟いたのは、咆哮。あまりにも大きなその声に、耳を塞ぐ。

「ぐるるるるる…」

唸り声。巨大な伝説のポケモンが、目の前にいた。細長い筒状の身体は鮮やかな緑色で、黄色の輪のような模様がある。私を見つめる瞳は爪や牙と同じく鋭く、恐ろしい。

恐ろしい。けれど、何と雄大な姿だろうか。

私は、見惚れていた。その巨大で、美しい姿に。その、命の輝きに。

「貴様が、あの男の娘か？」

突如として頭の中で響き渡った、若い男性の声。まさか、誰かいるの？

辺りを見回しても、目に入るのは綺麗に整備された庭と、レックウザと、ラスタとライチユウだけ。誰も、いない。

「お、お嬢様？どうされたのですか？」

レックウザを警戒しながらも、私を気遣うラスタ。彼には、今の声が聞こえなかったのだろうか？

「今、男の人の声が……」

「それは吾輩だ」

また、聞こえた。やっぱり、誰かいる。

「吾輩？……レックウザ、あなた話せるの？」

「ふん。話してはおらん。……まあ、テレパシーのようなものだ。その男には聞こえておらんぞ」

ぶんと尻尾を振ると、風圧が生まれて髪が乱れる。すごい風圧だ。

「吾輩の質問には、しっかりと答える。貴様が、あの男の娘かと訊いた」

「あの男？」

聞き返すと、苛立ったように尻尾を地面に叩きつける。どれほどの力で叩いているのか、地面が揺れる。

「吾輩を、貴様が手にしたそれで捕らえた男だ」

それ、とはマスターボールのことだろう。忌々しげに紫色のボールを睨むレックウザ。

「…ええ。あなたを捕獲したのは、私のパパだと思うわ」  
その瞬間。とてつもない殺気を感じた。

「お嬢様！」

ラスタに腕を引かれ、私の立っていた場所にレックウザの尻尾が叩きつけられる。先程の比ではなく、地面が抉れた。

助けてもらわなくては、死んでいた。

「…ありがとう、ラスタ」

「お礼など結構です！」

背後に私をかばい、ラスタがレックウザを睨みつける。ライチュウが、頬袋からビリビリと微かに放電している。

「…これしき、自らで避けることもできないか。貴様如きが、この吾輩を従えようなど笑止千万！」

向けられた視線には、侮蔑がこもっていた。テレパシーが通じていないラスタにも、それがわかつたらしい。

「…お嬢様、レックウザは何と言ったのです？」

「この程度、自分で避けられないのか。貴様などが私を従えようなど、笑わせるな！…と言っているわ」

レックウザの言う通りなので、淡々と伝える。従えるつもりはないけれど。

「吾輩を従えるどころか、貴様のような虚ろな娘に仕えねばならんその男も不憫よ。あの男に仕えればよいものを…人間の、事情というやつか？」

小馬鹿にしたように、レックウザが笑う。黒く縁どられた口が吊り上がったので、おそらく笑ったのだろう。

「…お嬢様」

通訳を、と目で乞われ、そのまま伝える。

「私を従えるどころか、貴様のような空っぽな娘に仕えなくてはならないその男も不憫だな。娘の父親に仕えればよいのに…人間の事情というやつか?…と言っているわ」

「…何ですって?」

ラストの雰囲気が変わった。…怒った、のだろうか？

「…伝説のポケモンだからって、好き勝手言ってくれますね。こんな人を見る目もない子蛇に、マスターボールを使う価値なんてありませんよ」

「何だと!？」

レックウザが、怒りの声を上げる。今しがたまで侮蔑を浮かべていた目は、憤怒に染まっていた。

「人を見る目がない、と言ったのです。お嬢様は、一見すると無気力で何もする気のないダメ人間のようですが、とても優しいお方です。そのことに気付きもしないあなたに、よく伝説なんて大層な呼び名が付いたものですね」

「ふん！優しいだど!？己の力もわきまえぬ人間が、偽善に酔っているだけであるうが!」

吐き捨てるように、レックウザは言った。

「実に下らぬ!」

張り詰めたような緊迫感。のどかな庭にはまったく似合わない。

…私は、戸惑っていた。ラストの言葉に。

優しい？私が？

「お嬢様。この子蛇の通訳を、お願いします」

戸惑う私そつちのけで、睨み合う両者。

「…えっと…優しさなど、己の力もわきまえない人間が、偽善に酔っているだけだ。下らない…ですって」

私の訳を聞いたラストは、腕を組んで笑った。

巨大な身体を見上げるその目にあるのは、勝ち誇ったような色。

「…やはり、人を見る目がありませんね。お嬢様は、自らの行為に酔いしれるような愚かな方ではありません。この方の真なる優しさを、そんな低俗なものと捉えるあなたのほうが、己をわきまえるべきですよ」

「…調子にのりすぎだ、人間!」

レックウザの怒りが、爆発した。通訳なしだが、ラストにはその



咆哮の意味がわかったらしい。

開戦の、咆哮。

「…上等です！私の主を侮辱したことを、後悔しなさい！」  
こうして、戦いは始まった…。

## レックウザはお怒りのようです（後書き）

：カノンお嬢様そっちのので、レックウザとラストが喧嘩してま  
すね。正直言つて、彼の存在は一話限りでした。しかも、名前なし  
のただの執事です。ですが、話を進める上で彼の存在が必要になっ  
てくることに気が付き、こうして立派な主要人物となりました。考  
えた人物は全員好きですが、彼もなかなかお気に入りです。

今のところ、人物の容姿の描写はなしですが、これからの話でし  
ていきます。現在わかるのは、カノンお嬢様がまな板ということぐ  
らいでしょうか（笑）。

ポケモン大好きなのにバトルは苦手。こんなまどろみの作品です  
が、楽しんでいただけたら嬉しいですよ！

見たくないの（前書き）

ごめんなさい、ラスト。2話でのキミの名前、間違えてました。

…ラスク？誰それ、です。後書きで「お気に入りです」とかどの口が言うのでしょうか。…反省します。

え、何故か私が投稿しようとするエラーになります。ので、書きあげているのに更新できないという事態が起こるかもしれません。…投稿したいのですよ！？まどろみは！

…お気に入り登録してくださいった方、お読みになってくださった方、ありがとうございます。私は小説が大好きですので、これからも頑張っていきたいです！

## 見たくないの

「くらえ！」

レックウザの口から放たれた、『りゅうのいぶき』。

「ライチュウ！『まもる』！」

「ライツ！」

ラストの指示に、即座に従うライチュウ。瞬時に球状の壁を展開し、身を守る。

「小癩な！…叩きのめしてくれ！」

防がれたレックウザは、尻尾をゆらりと振った。振られた尾が、鋼の輝きを帯びる。

「ライチュウ、『10まんボルト』！」

「ラツ…」

応え、身体から電気エネルギーを放とうとするよりも早く、  
「遅い！」

レックウザの尾が、ライチュウを吹き飛ばした。おそらく、『たたきつける』ではなく、『アイアンテール』。

「ライチュウ！？…すまない、戻れ！」

植え込みで戦闘不能状態となったライチュウを、ボールに戻すラスト。得意げなレックウザを、悔しげに見据える。

「…むっ！？身体が…！？」

そのとき、レックウザの動きが鈍くなった。  
にやりと、ラストが笑う。

「…『せいでんき』。ライチュウの特性です。物理攻撃してきた相手を、麻痺させる…運がないですね」

好機とばかりに、モンスターボールを投げる。現れたのは、ジュゴン。

「許さぬぞ！人間！」

麻痺したというのに、レックウザの闘志は衰えない。それどころ

か、ますます怒り、高まっている。

「通訳は結構ですよ、お嬢様!…ジユゴン、『ねこだまし』!」

ジユゴンが、小さな手を叩く。びくりと、レックウザの巨体が怯む。

「今です!『れいとうビーム』!」

氷タイプの技は、ドラゴン&飛行タイプのレックウザには効果抜群。大ダメージを受ける。

ただしそれは、『当たれば』の話だ。

「…馬鹿な!麻痺してなお、これほどの速さで動けるとは…!」

『ねこだまし』の追加効果で怯んだレックウザだったが、発射された『れいとうビーム』を飛んで回避してみせた。

「…はっ!伊達に伝説と呼ばれておらんわ!」

驚くラストを嘲い、麻痺したとは思えない速度でジユゴンを翻弄するレックウザ。

「ジユゴン!『ごごえるかせ』!」

「甘いわ!」

広範囲の氷技に、すかさず上空に飛び上がって躲したレックウザは、

「恨むならば、吾輩に刃向った愚かな主を恨め!」

急降下して、ジユゴンを鋭い爪で切り裂いた。

『ドラゴンクロー』。完璧に、決まった。

しかしジユゴンは、倒れなかった。

「なっ…!?!」

レックウザは驚き、動きを止めた。

今にも力尽き、倒れそうな、ジユゴンの間近で。

「最大パワーで『ふぶき』!」

「ジユゴオン!」

瀕死の状態で繰り出される、ジユゴンの『ふぶき』。

「ぐおおおおおおお!?!?!?!」

吹き荒れる『ふぶき』。その威力は凄まじく、庭の木々が全て凍

りつき、私は余波で吹き飛ばされそうになった。

視界が白で覆われ、何も見えなくなる。が、レックウザの苦悶の咆哮ははつきりと聞こえた。

「…やめて」

私の声など、その苦痛の叫びにかき消される。

「ジュゴン!? しつかりしなさい!」

視界が晴れ、私の目に映ったのは、傷つき倒れたジュゴンと駆け寄るラスタの姿。

「…はっ、…はっ…」

そして、荒く息をつくレックウザ。かなりのダメージを負っているようだ。

それなのに、瞳に宿る闘志は微塵も薄らいでいない。

「…ありがとうございます、ジュゴン。よくやってくれました」

ボールにジュゴンを戻し、レックウザと向き合うラスタ。その手には、すでに三体目のモンスターボールが握られている。

彼の目にも、戦うという決意があった。このレックウザに何としても打ち勝つという、強い決意が。

…私は、何をしているのだろうか。一番の当事者であるはずの私が、傷つくこともなく傍観しているなんて。

「…なかなか根性のあるジュゴンではないか。驚かされたぞ」

にいと笑う、レックウザ。身体は、ぼろぼろだ。

「そちらこそ、私のジュゴンの『ふぶき』を受けてまだ立っているとは…さすがですね」

賛辞に賛辞で返すラスタ。三体目のボールを握る手が、震えている。…それは怒りか、恐怖か、悲しみか、武者震いか…。

わからない。レックウザの言う通り、空虚な私には。…だけど。

「…いや」

もういやだ。これ以上、傷つくところを見るのは。

このまま戦い続ければ、失ってしまいそうな気がする。…大事な、何かを。

「やめて！ラスタもレックウザも、もうやめて！」

「やかましい！引っ込んでおれ、小娘！」

張り上げた声も、レックウザの唸りに近い怒鳴り声で一蹴されてしまう。

「お嬢様、危険ですからそこにいてください」

レックウザが止まらない限り、ラスタも止まる気はない。静かに言うと、ボールを振りかぶった。

いけない。また始まってしまう。

私は、駆けだしていた。衝動的に。

頭にあるのは、止めなくてはという思いだけ。

「…血迷ったか小娘」

ラスタは、はるか後方にいる私が駆け寄って来ていることに気付いていない。

そして、レックウザの言葉は私にしかわからない。

レックウザの尾が、揺れる。

来る！

そう感じ、振り下ろされた尾を間一髪回避する。…レックウザが麻痺していなければ、躲すことなど到底不可能だっただろう。

「ほう…」

レックウザの目がわずかに見開かれ、

「お嬢様!?!」

振り返ったラスタが、悲鳴に近い声で私を呼んだ。

「ラスタ！命じます、動かないで！」

モンスターボールを投げようとした彼を止め、そのまま走る。

手にあるのは、マスターボール。

「小娘、貴様何を…」

「…そこまでよ、レックウザ！」

レックウザの言葉を遮り、マスターボールを向ける。

「戻りなさい、レックウザ！」

私の声と同時に、ボールから放たれた赤い光線がレックウザに当

たった。

「…貴様」

ボールに戻される寸前、レックウザは私の目を見て…笑った。

怒りでも驚きでもない…その目にあるのは、もっと別の…。

緑色の巨体が消えた庭に転がっていたのは、一個の紫色のボール  
だった…。



見たくないの（後書き）

…まだ旅立ちもしないなんて…進行の遅さに愕然とするまどろみです。オリジナルキャラばかりで、公式のヒビキくんやコトネちゃんが出てきません。これはまずい！

「…私では、役不足？…そうよね」

…ってああ！？カノンお嬢様が心なしかがっかりしておられる！？

「まどろみさん…私の名前を間違えただけでなく、お嬢様をがっかりさせるとは…覚悟はできていますか？」

ひいひいひいひい！！ごっ、ごめんなさいひいひいひい！！

「作者・まどろみ猫逃亡のため、後書きを終了します。読んでくれた人、ありがとう！」

「近いうちに、私達にも出番があるってことね！」

「…ふん。別に、どうでもいいけどな」

## 気に入った！（前書き）

はい、前回の後書きでラストさんに追っかけられたまどろみ猫です。：バトルの描写は難しいです。このお話は、お嬢様の人として、トレーナーとしての成長を描きたいので、バトルはあまりしません。それでもいいよという方は、どうぞお読みください。

気に入った！

屈んで、マスターボールを拾う。

「…お嬢様！ご無事ですか！？」

ゆっくりと、駆け寄ってきたラストの方を向く。

「…ラスト」

急に、足から力が抜けた。どうしてだろうと客観的に考えていると、ラストが抱きとめてくれた。

「ラスト、大丈夫？怪我とかしていない？」

ポケモンバトルでは、技に巻き込まれてトレーナーが大怪我をすることだってある。心配になって訊くと、

「…！こちらの台詞ですよ、カノンお嬢様…！」

ぎゅっと、抱きしめられた。…よかった、怪我はしていないようだ。

「お嬢様の身が危ういのに、動くななどと…！もう二度と、あんな命令はしないでください…！」

抱きしめてくるラストの腕は、強くて。

絞り出すような声は、泣き出しそう。

「…うん。ごめんなさい…！」

私は、謝っていた。

ラストを、苦しめてしまったと気付いたから。

自己嫌悪、というものがある。今の私は、正にその自己嫌悪中だ。

『戻りなさい、レックウザ！』

…何だ、あの言い方は。あれではまるで、私がレックウザのトレーナーのようだ。

…私に、トレーナーの資格などないのに。

「お嬢様、御気分はいかがですか？」

いつの間にか、ラストが部屋にいた。心配そうに、ベッドで寝て

いる私を窺う。

「…良くは、ないわ。私、レックウザに命令してしまったから」

身体を起こして、膝を抱える。平らな胸だと、この姿勢はとりやすいのだ。

「…レックウザ、怒っているでしょうね」

ナイトテーブルに置かれた、マスターボール。ランプの明かりを受け、妖しい紫色に輝いている。

「あんな偉そうなこと言っておいて…ライチユウもジユゴンも、レックウザだって傷ついた。みんな、私のせいだわ…」

膝に、顔を伏せる。申し訳なくて、ラスタの顔が見れなかった。

「…お嬢様。やっぱりあなたは、お優しい方です」

どんな顔をして、そんなことを言うのか。

「やめて。…私は、優しくなんてないわ」

顔を伏せたまま、言う。胸が、苦しい。

「…やさしく、なんか…！」

ぐっと、溢れてきそうになるものを押さえつける。無理矢理に。

泣かない。泣けない。私に、涙なんてないはずだもの。

「…出て行ってラスタ。一人に、してちょうだい」

そう言わなくては、彼はここに居続けるだろうから。…居たくもない、はずなのに。

「わかりました。カノンお嬢様、お休みなさい」

「…おやすみ、ラスタ」

ドアが、静かに閉められた。

案の定、私の両目から涙が零れることは、なかった…。

カノンお嬢様は、独りを望まれている…。

出て行くと、命じられたならば。その通りに、しなくてはならない。

たとえ私が、お傍にいたいと願っても。お嬢様が、それを望まれないなら。

静かにドアを閉め、私はため息を吐く。無性に、悲しかった。  
「…旦那様」

何処か遠い地におられる、敬愛する主人に思いを馳せる。  
あの方なら、お嬢様のお心を癒すこともできたのに、と…。

仕方のないことだと、わかつている。あの方は、ご多忙なのだ。

『カノンを、頼んだぞ。無気力で無表情で無感情だと思いかもしれないが、そんなことはないからな』

五年前。屋敷を出て行かれたきり、旦那様は戻られない。

…最初は、旦那様の為だった。ご命令だから、お嬢様のお傍にいた。嫌では決してなかったけれど、本音を言えば旦那様に付いて行きたかった。

それが、いつしか変わった。お嬢様の、お傍にいたいと切望するようになっていた。

「…お嬢様」

ドアの向こう側で、あなたは泣いているのですか？そうだとしても、私は…。

ここから、動くことができないのです。あなたの、ご命令がない限り。

「娘よ！吾輩は貴様を気に入ったぞ！」

目を細め、穏やかに私を見るレックウザ。昨日の敵意はどこへいったのか。

「…ありがとう」

屋敷は、ジョウト地方の孤島にある。孤島といってもそれなりの大きさで、山もあるし湖もある。

パパの、所有地だ。住んでいるのは、元からこの島に生息していた野生ポケモンと、屋敷の使用人さん達だけ。

「…薄い反応だ。もっと喜べ！」

私の反応が不満だったらしく、レックウザは低く唸った。

「それでも、喜んでいるのよ？」

屋敷の裏山。少しひらけた場所で、私とレックウザは向き合っている。時折木々が揺れるのは、珍しい訪問者を見物しに来た野生ポケモンがいるのだろう。

「…そうか？ならばよい！」

尊大な態度で言っていると、レックウザは私の目の前に下りてきた。

見上げていると首が疲れるので、正直ありがたかった。

「…娘、昨日の発言を撤回しよう。…すまなかったな」

…何故、私が謝られているのか。謝ろうと、思ったのに。

「レックウザが、私を空っぽって言ったこと？…その通りだから、謝ることなんてないわ」

そう言つと、レックウザはぐるぐる…と唸った。どこか、悔しげに。

「わからないのか、娘？吾輩が間違っていた。貴様は、虚ろなどではない。…虚ろな者に、あのような目はできぬ」

どうして、わからぬのか…。どうやら、私がレックウザの言う事を理解できないのが悔しいらしい。

「吾輩の一撃を避け、単身吾輩に向かってきた貴様の目は、生き生きと輝いておつたぞ？…吾輩は、貴様の目に魅せられたのだ！」

じいっと、至近距離で見つめられる。…そんなことを、言われても。

「…吾輩の身体に近い、あの空のように澄んだ翠の瞳…あのとときの貴様の目は、美しかったぞ？あの子を見たのが吾輩だけというのは、何とも嬉しいことだな！」

言葉通り、レックウザは嬉しそうだった。地表から数メートル浮かび上がって、長い巨体をくねらせ飛行する。

木々に囲まれた、空。天空の化身と呼ばれるレックウザには、狭すぎるだろう。

「…こちらこそ、ごめんなさい。私達親子の都合に付き合わせて…痛かったわよね」

身体も、心も。傷付いただろうに。

「そのようなこと、伝説と呼ばれし吾輩達には日常だ。…娘が気にすることではないよ」

飛行を止め、優しい目で、レックウザは言う。

「…遙かな昔から、吾輩の強大な力を欲する人間と、戦い続けてきた…。だが、あの男は違った。あの男が望んだのは、『吾輩と、娘がトモダチになる』こと…」

あの男とは、パパのこと。

「初めて貴様を見た時は、冗談ではないと思ったが…今では、悪くないと思っておる」

首を振る。それでは、ダメだ。

「私には、あなたという資格はない…私には…」  
俯いた私に、

「な、泣くなよ!？」

慌てたレックウザが、声をかける。

「資格など、必要なかろう!? 吾輩が勝手に貴様の傍に言ったのだ!…だから、その…難しく考えるな!これだから人間は…!」  
わたわたと忙しなく飛び回るレックウザの影が、地面に映る。

「…泣いて、ないわよ…。レックウザ、ありがとう」

顔を、上げる。こんな私を、慰めようとしてくれるレックウザの気持ち、嬉しかった。

「…何だ。娘、そんな風に笑えるのではないか」

にっと、レックウザが笑った…。

## 気に入った！（後書き）

ポケモンは道具ではない！…そうであるかはトレーナー次第だと思います。対等？そんなのありえないというのも、また一つの考えです。

ポケモンとはこういう存在であるというのは、トレーナー自身を考え、決めることだと思います。悪だの善だの、そんなものは幻想にすぎません。絶対なる悪も、絶対なる善も、存在しないのです。それが、私の考えです。

読んで下さった方、ありがとうございました！



## 狙いくる者（前書き）

初めて買ってもらったポケモンは、金・銀でした…。赤・青・緑は姉の世代です。私は金、妹は銀を買ってもらい、仲よく遊びました。…懐かしいです。

しかしです。それ以降の作品もプレイし、さまざまなかポケモンを育ててきたまどろみ猫も、どんな技を覚えるかはうる覚えです。そのため、一番末の妹が持っている攻略本に頼ろうとしていたのですが…売り払われていました。

だから、今日買ってきました！ポケモンの図鑑、見ているだけで楽しいです！

## 狙いくる者

「娘よ、名は、何と言うのだ？」

吾輩は、この変わった娘に名を尋ねた。まさか、吾輩が人間に興味を持つ日が来ようとは…。

「カノンよ。レックウザに、名前はあなの？」

吾輩の名…そんなものはない。一匹で生きる吾輩には、必要なかったのだ。

「ない。…カノンよ、貴様が吾輩の名を付けよ」

この娘なら、名付けられてもよい気がする…。

「いいの？…うん…」

しばし、真剣な顔で考え込む娘。今更ながらに気が付いたが、この娘、なかなか可愛い顔をしている。

やけに必死になって娘を守ろうとしていたあの男。名は確か…ラスタと言ったか？…ほほう。そういうのも、面白いやもしれぬな。などと考えていると、

「レッシー！レッシーでどうかしら！？」

娘…カノンが、昨日とは違う輝きに満ちた瞳を、吾輩に向けた。

…レッシー？

がぱつと、顎が外れそうになる。…開いた口が塞がらないとは、正にこのこと。

「…すまぬ。レッシーだけは勘弁してくれ…！」

純真な瞳から目を逸らし、吾輩は嘆願する。レッシーだけは、何としても回避しなくては！

「…気に入らなかつた？レックウザ…」

しょぼんと、落ち込むカノン。一生懸命考えてくれたのだろう。罪悪感がすぎすぎと痛んだが、それでも！

「…すまぬな」

レッシーは、レッシーだけは！

「わかった…。ごめんね、レックウザ」

頂垂れるカノン。どうすればよいのか…話題を、変えればよいか！？

「そうか、それだ！…ナイス、吾輩！」

「そ、そうだ！カノン、あのラストという男はどうした？」

「…ラストは、パパからお屋敷の管理も任されているから、忙しいの…」

無表情の中に、どこか寂しさを漂わせ、カノンは言った。

「…ラスト、本当はパパに付いて行きたかったの。昨日、レックウザが言った通り」

…地雷だったようだ。昨日の吾輩を、全力で殴りたくなった。

いかん！ますます沈んでいる！

ええい！引き揚げられるか！？

「…そうか？吾輩には、あの男がカノンのことしか考えておらんように見えたぞ。あそこまで必死になるのだ、もっと己に自信を持って」

「自信…？でも、私には…」

…そこまで、自身を卑下することもあるまい。

「安心しろ。カノンは欠けたりしていない。…ただ少し、心に鈍いだけだ」

実際、そうだと吾輩は思っている。この娘には、ちゃんと『感情』がある。

「…そう、なのかな…」

戸惑うカノンに、力強く頷いてみせる。

「そうだとも！…そうだな、吾輩と旅に出てみないか？世界は広い、色々な人やポケモンと出会えるぞ？」

天を仰ぐ。晴れ渡った空は、どこまでも広い。

「カノンは、空虚ではない。…旅をすることによって、それを知らるだろう」

辛いことも、楽しいことも、悲しいことも、嬉しいことも…もっと、味わうべきなのだ。

「旅…旅すれば、私は…」

カノンも、空を仰いだ。囁きが、吾輩にも聞こえた。

「…変わる、かしら…？」

「変われるとも。そう願い、行動すれば」

ほとんど思いつきだった、なかなかいい案ではないか？カノンも、元気になったようだし。

…流石だな、吾輩！

得意になっていると、そっとあたたかいものが、吾輩の背を撫でた。何だ？

「…ありがとう、レックウザ。私と一緒に、旅に出てくれる？」

あたたかいものは、カノンの小さな手で。遠慮がちな、微笑みを浮かべて。

…まったく、変わった娘だ。

「よかるう。吾輩とカノンは『トモダチ』だからな！」

以前の吾輩ならば、そんなことは欠片も思わなかっただろうに。今では、そうありたいとまで思っているのだから。

「…レックウザ、発見！捕獲作戦開始！」

穏やかな空気を乱したのは、人間。

「…飛ぶぞ、カノン！」

「きゃ！？」

本能で危険を感じ、カノンを掴んで上空へと逃れる。手の中のカノンを潰さないよう気を付けながら、地表に目をやる。

先程まで、吾輩達が立っていた場所に『れいとうビーム』が放たれていた。

直感に従っていなければ、直撃だっただろう。

「レックウザ？急に、どうしたの？」

手の中のカノンが、事態をわからず尋ねてくる。

「…敵だ。吾輩を、捕らえようとしている」

答えた声が固くなったのは、カノンの存在を再認識したからだ。

…このままでは、応戦できない。

「連続で『れいとうビーム』と『10万ボルト』だ！絶対当てる！」  
考える時間も与えられずに、地表から技が放たれる。躲しながら、吾輩は更に上空を指指そうとして…やめた。

吾輩は、大気圏でも生きられる。しかし、カノンは何？人間の身が、上昇して耐えられるのか？

…わからないなら、すべきではない。そう判断し、回避を続ける。

「…飛行部隊！その娘を狙え！トレーナーだ！」

敵の怒鳴り声。…飛行部隊だと！？

首を巡らすと、こちらに向かってくる無数の黒い影。

「…ゴルバットだわ」

流石の我輩も、カノンに目を向ける余裕はない。地上からの技と大量のゴルバットの『エアカッター』を回避しつつ、この状況を打破する方法を考える。

どうすればよいのか。今は何とか躲せているが、いずれ当たる。だが、反撃しようにもカノンが手の中にいる。…戦いにくいし、危険だ。

逃げ出そうにも、すでにゴルバットの群れに囲まれている。強行突破も考えたが、それもカノンのことを考えると…。

「…レックウザ、私に考えがあるのだけれど…」

八方塞の我輩に、遠慮がちに声をかけるカノン。

「考え！？どのような考えだ！？」

ますます激しくなる攻撃。手を講じなくてはと焦る吾輩に、カノンが提案する。

「…駄目だ！危険すぎる！」

しかしそれは、『吾輩』ではなく『カノン』が危険にさらされる作戦だった。

「ぐっ！？」

「レックウザ！？」

気が逸れ、不覚にも一撃もらってしまった。不幸中の幸い、『れ

いとうビーム』ではなかったが。

「お！当たったぞ！もつと当てて弱らせる！」

オニドリルに乗り、ゴルバット達を指揮する男が言う。…調子にのりおつて！

「…でも、このままじゃレックウザが…！私のことなら、気にしないで！」

必死に、カノンが言いすぎる。自身より、吾輩の身を優先するとは…。

こんな状況にも関わらず、笑みが浮かぶ。…尾に、痛みが走ったが、大して気にならない。

「…わかった…良いのだな、カノン？」

手の中の娘。その目に恐れの色はなく、吾輩が魅せられた煌めきがあった。

「ええ！…いくわよ！」

頷き、カノンは紫色のボールを、吾輩へと向けた…。

## 狙いくる者（後書き）

お読みくださり、ありがとうございます！今回はレックウザ視点です。彼（伝説のポケモンであるレックウザに性別はありませんが、オスっぽいので彼と呼びます）は、今まで見てきた人間とは違うカノンお嬢様に、自分でもよくわからない感情を抱いています。…なにやら、誤解を招きそうな表現ですが、これからカノンお嬢様とレックウザは絆を深めていくのです。

レッシー…可愛い名前だと思うのですがねえ…？

構想はあらかたできているのですが、何分時間がなくて…不定期になっってしまうかもしれません。ごめんなさい！

…ペンドラー可愛いですよペンドラー…（ぼそり…）。

…仕方なかるう！』はかいごうせん』、決め技であるう！？（前書き）

…頑張りました！睡眠時間？そんなのどうでもいいのです！書き  
たかった！書けた！嬉しいです！

妹に、技を漢字で書かないのかと訊かれました。…ひらがなは『  
ださい』そうです。漢字で書くと、だいぶ感じが変わってしまうの  
ですよ！だからです！



…仕方なかるう！』はかいこうせん』、決め技であるう！？

私を掴んで飛行していたレックウザを、ボールに戻す。

当然、私は落下する。

しっかりとマスターボールを握り、真つ逆さまに落ちて行く。私達を取り囲んでいたゴルバットが、オニドリルに乗った男性が、驚いているのが見えた。

「気は確かか！？…だがチャンスだ！ゴルバット！マスターボールを回収しろ！」

男性の指示に従い、ゴルバット達が私の手にしたマスターボール目指して降下する。

…そう。『私』目指して『一直線』に。

笑みが、こぼれた。この高さから地面に墜落すれば、命はない。けれど、それでも私は、笑っていた。

地上からの攻撃は止んでいる。何もせずに、ゴルバット達がレックウザをゲットするのを待っているのだろう。

風を切り、重力に従う身体。腕を少し動かすのも大変だった。

「…レックウザ！お願い！」

何とか腕を真上に向け、ボールの開閉スイッチを押す。

「任せよカノン！…くらえ！」

現れた、巨大なドラゴンポケモン。大きな口を開いて、吼える。

「しまった！？散れ、ゴルバット！」

男性が指示するも、時すでに遅し。

レックウザの口に集束した光線が、一直線に降下していたゴルバット達を消し飛ばす。

「…『はかいこうせん』」

圧倒的なまでの威力。一掃されたゴルバット達。それは計算通りだったけれど。

「…反動で、動けなくなるのよね…」

現在も落下している私。固まったレックウザが遠のいていく。もうすぐ、地面に激突する。…恐怖は、ないけれど。ラスタ…私のこと、忘れちゃうのかな…。

レックウザは、空虚じゃないって言ってくれた。それなら…残れば、いい。彼の中に、少しでも。

私が。…どこまでも、身勝手ね。

目を閉じる。最後に見られたのは、雲一つない空と、焦げて落ちて行くゴルバットと、…レックウザ。

私の、初めての『トモダチ』…。

「カノン！」

…レックウザ？

ふわりと、優しいものに包まれる。落下が、止まる。

鮮やかな緑が、目に入った。

「…間に合ったか！胆を冷やしたぞ！」

「あれ？…レックウザ？」

私は、レックウザの手の中にいた。…助かった、ようだ。

下を見ると、地面まで数メートル。

「ゴルバット共は倒したぞ！待っておれ、残ったあやつらを…お？」

レックウザが、驚きの声を上げた。何だろつと首を巡らせると…。

鬼が、いた。

「…あやつら…哀れな…」

遠い目をして、レックウザが呟く。そつと、私を地上に下ろしてくれた。

「…ラスタ…！」

鬼が、にっこりと笑う。

「お嬢様、…お姿が見えないと思えば…」

立ち上る怒気。顔は笑っているが、目が笑っていない。

「お説教は後です。…この不法侵入者二人を、ジュンサーさんに突き出してからたっぷりとして差し上げます」

ルージユラとエレブーを従えた男性と、オニドリルに乗った男性。  
「ど、どうする!?!」

「…何かヤバそうだ!逃げろぞ!」

怒るラスタに逃げ腰となった二人を、

「逃がしません」

軽く放られた、三つのモンスターボール。フシギバナ、カメツクス、リザードンが、二人と三匹のポケモンを睨み据える。

加えて、こちらにはレックウザもいる。男性達の顔から、血の気が引いていく。

「さあ…お仕置きの間ですよ?」

爽やかに、ラスタが言った。

男性達の悲鳴は、島中に響き渡ったという…。

「…どうして、私に声をかけてくださらなかったのですか?」

抑えた声でそう言うラスタは、私を見ていない。

「…昨日、レックウザをボールに戻せたのは、運がよかったからです。そんなこともわからないお嬢様ではないでしょう?」

ぼろ雑巾と化した男性二人と、戦闘不能となった三匹のポケモンをジュンサーさんに突き出し、ラスタのお説教が始まった。

相当怒っている。見上げているのに、目も合わせてくれない。

レックウザは、神妙な顔で私達を見守っている。…遠い。

「わかっていただけ?…でも、ラスタは忙しいでしょう?邪魔しちゃいけないと思つて…」

「そんな気遣いは無用です!」

私の言葉を遮り、ラスタが怒鳴る。

「お嬢様は、わかっていらっしやらない!私はお嬢様をお守りするためにいるのです!それなのに、私に黙って屋敷を抜け出して、あんな危険な真似をして!…レックウザが間に合ったから良かったものの、一歩間違えば死んでいたのですよ!?!」

「いや、それはカノンが悪いのではない!カノンは『りゅうのはど

う』がよいと言ったのに、吾輩が『はかいこうせん』を…」

私をフォローしようとしたレックウザだったが、

「レックウザは引っ込んでいてください！」

ラストのものすごい剣幕に、ぐっと唸って引き下がる。

「…ごめんなさい。私に何かあれば、ラストがパパに怒られてしま  
うわね」

考えていなかった。ラストは、私の面倒も任されていたのに。

「…違う！」

「!？」

激昂したラストに、肩を掴まれた。…痛い。

「違う！そうではないのです!…私は！」

肩に、ラストの指が食い込む。痛い。

「私は！お嬢様をお守りしたいのです！お嬢様の、その自分の身を  
顧みない行動が、どれだけ私の心を抉るか知っていますか!?!…旦那  
様は、関係ありません！私は、私の意思でお嬢様をお守りしたい  
のです！」

理解できない。パパを抜きにして、どうしてラストが私を守ろう  
とするのか。

「…わからないわよ…!なんで!?!どうして!?!」

ますます力のこもる指が痛い。怒鳴るラストが怖い。

上空から落下するよりも、ずっと。

「…わから、ないわよ…!」

目頭が、熱くなった。何かが、溢れてくる。

「!?!ラスト！カノンを泣かせたな!?!」

レックウザが吼える。…泣いている？私が？

ラストが、狼狽する。肩にこもっていた力が、抜けた。

「…カ、カノンお嬢様!?!」

おろおると、ラストが覗きこんでくる。

「…ラスト、私、泣いているの?」

目元を触ると…濡れて、いる。

「はい！…お嬢様が泣かれるところなど、はじめて見ました！」  
微笑むラスト。どこか、嬉しそうだ。

「…どうして、嬉しそうなのです？」

「ついさっきまで、あんなに怒っていたのに。」

「お嬢様が、ご自分の感情を露わされたからですよ！…申し訳ありません、痛かったですでしょう？」

「…痛かったけど…いいの。ラストが、笑ってくれたから」

心配をかけてしまった。そこまで、私のことを思っていてくれたなんて、知らなかった。

「…っ！ありがとうございます…！」

「…あれ？ラストの顔、ちよつと赤い…？」

「…熱でも、あるのだろうか…？」

…仕方なからう！』はかいこうせん』、決め技であるう！？（後書き）

『はかいこうせん』！？アニメで観るとかつこいいですよね。

…時間ないです。仕事行かなくては…。仕事中に、アイデアが湧くこともあるので、頑張りたいです。…『人』を見たくは、ないのでがね。

…ご覧になって下さった方、ありがとうございました！

## 旅立ち（前書き）

ポケモンの夢をみました、まどろみ猫です！ゲームでは技の効果とか能力値とか戦っている最中でも見れますが、現実では（夢ですが）そんな暇はありません。ですが、何より困るのは…ボールに入っているポケモンがわからないということです！アニメでも、なんでもわかるのでしょうか！？

やっとお嬢様の旅立ちです！あ、アニメでは十歳で旅立ちですが、この小説では年齢制限なしです。でも正直、十歳で旅立ちなんて危険すぎだと思います。

…さようなら、ラスト！キミにもまたいつか、出番はある！

## 旅立ち

「旅に出たいの」

そうおっしゃったカノンお嬢様。その頬を伝っていた涙を指で拭い、私は笑った。

乱れる心。悟られぬように。

お嬢様が私のことを、気に掛けてしまわれないように。

「そうですね。わかりました、旦那様には私からお伝えしておきま  
すね」

…いつか、こんな日が来るとわかっていた。来ないでほしいと、願っていた。

だけど、お嬢様が望まれるのなら…私は、見送ろう。

笑顔で。お嬢様の、ご無事と成長を願って。

「…あの状況で『はかいこうせん』はダメだろう。ちょっと考えればわかるだろう？」

むう。ラストのフシギバナが、咎めるような目で吾輩を見てくる。「うん。フシギバナの言う通りだ。…レックウザ、どうして『はかいこうせん』を？」

カメックスも、リザードンまで。

「…仕方なからう！『はかいこうせん』、決め技であろう！？」

こちらを目掛けて降下してくるゴルバットの群れ。気分が高揚して、気が付いたら『はかいこうせん』発射していた。

「「「……………」」」

三匹とも、呆れてものも言えないといった様子だ。…は、反省しておるから、そんな目で見るな！

「…なあレックウザ…ラスト、お嬢様のこと大好きだからさ…頼むぞ、ほんと」

…視線が痛い。



「でも、お嬢様この島から出てっちゃうんだよなあ…ラスタ、大丈夫だろうか？」

カメックスの視線が、少し離れたところで話している二人に向けられる。よし、気が逸れた。

「そうだよなあ…。屋敷なんてほつといて、二人で旅すればいいのにな」

フシギバナも。

「ああ…。どこの馬の骨かもわからない男に、世間知らずなお嬢様が騙されたら、ラスタがどうするか想像するだけで怖い」

ぶるつと、身震いするリザードン。…何を想像したのか。

「ラスタも、自覚がないのがまずいんだよなあ…」

「仕事一筋に見えて、お嬢様一筋なんだよなあ…自覚してないけど」

…何だ。本人たちよりも、ポケモンのほうがよく見ているではないか。

「…いや待てよ！？離れて自覚するかもしれないぞ!？」

リザードンの言葉に、

「おお！あるかもしれないな！」

「それで、追っかけたりするかもな!？」

盛り上がり始める三匹。…何としても、あの二人にくつついてもらいたいらしい。

会話の末、『このままでは進展しないから、一度離れてお嬢様の存在の大きさを自覚させよう』という方針になった。

「…カノンが旅している内に、出会った男を好きになったらどうするのだ？」

吾輩の疑問は…黙殺された。ひどいぞ！

ラスタは、反対しなかった。わかりましたと、笑ってくれた。

猛反対を予想していた私は、拍子抜けした。…少し、がっかりもしていた。

「行かないください」

そう、引きとめて欲しかったのかもかもしれない。このままの私でも、傍にいていいのだと…。

ふるふると、首を振る。何を考えているのか。

そんなことを期待されても、ラストだって困るだろう。

明日、屋敷を旅立つ。…ラストとは、当分会えない。

そこに思い至って、胸の奥が疼いた。住み慣れたお屋敷を、豊かな自然のこの島を離れることよりも、それが辛い。

そう、『辛い』。…私にも、感情はあったのだ。

ソファに座り、ぎゅっとぬいぐるみを抱きしめる。古いけれど、メイドさんが洗濯してくれるから汚くはない。

ピカチュウの、ぬいぐるみ。十歳の誕生日に、ラストがくれたもの。連れて行くわけには、いけないから。

今、抱きしめておかないと。

机の上に置かれた、シオルダーバックとベルト。ベルトにはすでに、マスターボールがセットされている。

…私、頑張るから。今までずっと、ラストやメイドさん達に何でもしてもらっていたけど、全部自分の力でやるから。

失敗するだろうけど、挫けないから。…辛いことがあっても、逃げ帰ったりしないから。

だから…私を、たまにでいいから思い出してね？

いつもより、二時間も早く目が覚めた。ベッドで何度も寝返りを打つも、眠れそうになかったので起きる。

自分でカーテンを開けると、群青色の空に金色の星が数個、瞬いていた。まだ、陽は昇っていない。

空を、眺める。…じっと、陽が昇るまで。

今日も、晴れるだろうなと思いながら。

「…ワカバタウンの、ウツギ博士？ポケモン進化の権威である、ウツギ博士？」

この島は、ジヨウト地方の隅に位置している。一番近い町は、タ  
ンバシテイだ。

私は水ポケモンを持っていないので、レックウザに乗せて行っ  
てもらおうとしていた。大きな背中に乗せてもらい、行先を告げよう  
とした私に、ラストは封筒を差し出してこう言ってきた。

「お嬢様。…ワカバタウンのウツギ博士に、この封筒を…」

届ける、ということだろう。受け取った封筒は薄く、陽に透かす  
と紙が一枚入っていた。

「手紙？…古風ね」

パソコンやポケギアなど、電子連絡のほうがはるかに早い。屋敷  
にもあるし、研究者であるウツギ博士だってパソコンを所持してい  
るだろうに。

「旦那様が、わざわざポケモンに持たせて転送されてきたのです。  
ご友人のウツギ博士に、お嬢様の手で届けてほしい、と…」

苦虫を噛み潰したようなラスト。敬愛するパパの指示なのに、不  
満があるようだ。

「お嬢様、お疲れになったら無理せず休んでくださいね？この島か  
らワカバタウンまでは距離があります。レックウザなら大した距離  
ではないでしょうが…」

「ふん、当たり前だ！」

レックウザが、得意げに言う。早く飛び立ちたい様子だ。

「調子にのって、スピードを出してはいけませんよ？それから…」

その様子に、ますます心配になったらしいラスト。ここらへんで  
止めないと、延々と続いてしまう。

見送ってくれるメイドさんや庭師さん、コックさんが、複雑な顔  
をしてラストを見ていた。

「大丈夫よ、ラスト。無理はしないから。…じゃあ、いつてきます」  
軽く手を振る。メイドさんたちが、一斉に頭を下げた。

「…いつてらっしゃいませ、お嬢様」「」

初老の庭師さんとコックさんが、笑顔で手を振りかえしてくれる。

「気をつけてな〜お嬢!」

「お帰り、お待ちしています!」

…あれ?何だろう、この気持ち?

みんなを見てみると、行きたくないような…。

「…うん。ありがとうみんな」

これが、『別れ』の痛みなのだろうか。旅に出る前に、新しい『思い』を知ることができた。

頃合いかと、レックウザの巨体が浮き上がる。…いよいよ、出発だ。

「…っカノンお嬢様!少し、お待ちください!」

ラストが、駆け寄ってきた。

「貴様、いい加減に…!」

怒り出そうとしたレックウザだったが、制止してきたラストが持つものを見て口をつぐんだ。

リボン。ライトグリーンの、リボンだった。

「失礼しますお嬢様。すぐ、すみすから!」

レックウザの背中に、身軽に跳び乗ったラスト。私の後ろに回る。

…突然髪を触られて、驚いた。

「きゃあ〜!」

「…おお!」

何やら、黄色い声が聞こえてきた。…どうやら、ラストは私の髪をまとめてくれたようだ。

「…似合っておるぞカノン。カノンの瞳と同じ色の布が、黒い髪によく映えるな」

レックウザが、褒めてくれた。メイドさん達も、

「お嬢様、お似合いです!」

「可愛いですよ〜!」

口々に、褒めてくれる。…なんだか、こそばゆい。

このリボンはきつと、旅立つ私への饞別だろう。腰までとどく髪は邪魔になるかなと思いはじめていたけれど、これで大丈夫だ。

「ラスタ、ありが…!?!」

お礼をと、振り返りかけた私。後ろに立つラスタに、阻まれた。首に回されたラスタの腕。背中に感じる体温。

少し遅れて、脳が状況を理解した。…ラスタに、後ろから抱きしめられている。

「……つきやあああああああああああ!?!?!?!」

悲鳴に近い歓声が響く。レックウザが、絶句している。

「…カノンお嬢様、私の顔を見ないでください。見ないまま、旅に出てください」

耳元で、そう囁かれる。…何で? どうして? と、訊きたいのに。

「…わかったわ。ラスタ、リボンありがとう」

あなたの顔を見て、お別れを言いたいのに。

「いつてきます。元気でね」

私は、訊かなかった。言わなかった。

「こちらこそ…ありがとうございます。お気を付けて」

そっと、ラスタが離れる。…温もりと、一緒に。

「…よし! 行くぞ、カノン!」

レックウザの声とともに、地上が遠のく。

「お嬢様〜!」

「頑張ってください〜!」

メイドさん達の声が遠い。どんどん、離れていく。

「…みんな! またね!」

地上に向けて、声を張り上げる。聞こえただろうか?

感じる、風。天高く、舞い上がる。

…出発だ。

## 旅立ち（後書き）

：ゲームでのライバル（ジヨウト地方の、赤毛の彼です）は、ツンデレだと思えます。思う、じゃなくて確信しております。ああ早く彼を登場させたい…！

今日は、人物設定を書いておりました。公開はしませんが、各々の手持ちポケモンを決めました。できるだけジヨウト地方のポケモンです。伝説ポケモンはなしの方向で！

お付き合いくださった方、ありがとうございます！駆け足展開、申し訳ございません！

私、実はポニーテール萌えなのです…冗談ですよ（前書き）

サブタイトルは、完全な悪ふざけです。あのラストさんに、言わせてみたかったです！

今回は、メイドさんが登場します。あのお屋敷のメイドさんはかわいかったり美人だったりで「あれ？ここなんてハーレム？」という感じなのですが。残念なことにみんなどこかぶっ飛んでいきます。今回以降『メイド』という単語が出てきたら注意してお読みください。…淑やかな癒しなんて、彼女たちにはありません。

私、実はポニーテール萌えなのです…冗談ですよ

レックウザの巨体が徐々に小さくなっていく…。天高く浮かび上がったレックウザは、一度旋回すると飛び去っていった。

…いつてらっしやいませ、お嬢様…。

お見送りは、『笑って』できなかつた。どうしても、笑えなかつた。

「…寂しくなりますね、ラストさん」

右頬に、大きな傷跡があるメイドのリア。彼女は私の横に並び、報告する。

「島の南西に、船が接岸しようとしています…私、片づけてきましようか？」

青空を見上げていた彼女の目が、危険な輝きを帯びる。

「侵入者！？…空気読めないわね！」

「昨日の奴らの仲間でしょうか？」

ざわめく彼女達を、手振りで鎮める。このタイミングで侵入とは、確かに空気を読めていない。

「許可を得ずこの島に侵入した者は排除しろ…旦那様の御命令です。リア、一応確認しておきますが、その船は漁船や漂流船、何も知らない民間の船ではありませんか？」

侵入者探知・撃退担当兼メイドのリアは、首を左右に振る。普段は見せることのない好戦的な色を、隠そうともせず。

「…そうですね。では、リアと数名で迎撃してください。リアがいれば大丈夫でしょうが、何かあれば連絡を。他の者はお屋敷で待機です」

「…はい！」「」

私の指示に応え、各自持ち場へと移動する。私も、お嬢様のお傍に…。

「ラストさん。お嬢様ならついさっき、旅立たれたじゃないですか」



…そうだった。

「あ、やっぱりお嬢様のお部屋へ行かれようとしていたんですね」  
呆れた顔のリア。四人のメイドも、苦笑している。

「…ええ。それが、私の役目でしたから」

バツが悪い。いつも、そうしていたものだから。

「ラストさんは、最高責任者。私達使用人のリーダーですが、たまには暴れてみませんか？」

しゅるるる…器用にモンスターボールを指先で回して、リアは微笑む。

「最高ですよ…勘違いした連中をぶちのめすのは!」

「…私、ポニーテールよりツインテールのほうが、お嬢様に似合うと思うのですけど!」

リアが叫ぶと、

「待つてくくださいリアさん!三つ編みも捨てがたいと思います!」

「何言ってるの!?!右サイドで一つ結びでしょ!」

「いえ!左サイドよ!」

「何でもお似合いになれるわよ、お嬢様なら!」

メイド達の間で、論争が巻き起こる。

「…な、何言ってるんだこいつら?」

言い争っているメイド達に、呆気にとられている侵入者達。島には上陸していないが、海上でも旦那様の所有地だ。

「…はあ。気にしないでください!」

ため息が出る。…敵船の中で、もめてどうするのですか。

「…あなた方がこの島にやってきた理由をお聞きしたいのですが…  
なんだか疲れてしまったので、捕まえた後でゆっくり訊かせてもらいますね」

ぎゃーぎゃー騒がしい彼女達を視界から消して、モンスターボールを投げる。

「ニドキング!久しぶりに、思う存分暴れなさい!」

「…どうだカノン！広いだろう、世界は！」

飛行するレックウザ。その背中から見える世界は、果てなく続いていて。

「…そうね！海って、こんなにも青いのね！知らなかったわ！」

日光を反射してきらきら輝く水面。青い海にところどころ浮かんでいる、島の緑や灰色。

「うむ！空の青さとはまた違うな！…さっそく一つ、知ることができたなカノン！」

満面の笑みを浮かべるレックウザと、頷く私。

「うん！…一緒に頑張りましょうね、レックウザ！」

「無論だ！…よし、飛ばすぞ！」

快活に答えて、レックウザはスピードを上げた…。

「誰に口を利いているの？…身の程を弁えなさい！」

手足を縛られ、床に転がされた男。情報収集・尋問担当兼メイドのカコは、容赦なく男を踏みつける。

「あぁっ！…申し訳ありませんカコ様あゝ！」

身もだえする男。…視線を逸らしてもよいでしょうか。

「ふん…！これくらいで悦ぶなんて、つまらない男ね！」

ぐりぐりと、何時の間にか履き替えていたピンヒールで男を踏みつけるカコ。言葉と裏腹に、相当愉しそうだ。

「あああああああ…！もつと踏んでくださいー！！！」

頬を染め、カコに踏んでもらうことが至上の悦びだと言わんばかりの男。…目覚めてしまったようだ。

「さあ！踏んでほしかったら、ラストさんの質問にちゃっっちゃと答えなさいこの豚が！」

げしつと男を蹴りつけるカコ。

こら口が悪いですよとか何で痛がらずに悦んでいるのですかとか、ツッコむべきところは色々あった。それはもう、色々。

「…カコ、後はあなたに任せます」

だが、私は限界だった。一刻も早く、この場から立ち去りたい。そして、何も見なかったことにしたい。

「えっ!?!」

「訊きだすべきことはわかっているでしょう?…任せますから、後は好きにしてください」

丸投げだ。問題はないことも…ない。

「…お任せください!…悦びなさい!あんたみたいな豚が、この私に相手してもらえないことにね!」

「カコ様あああ!」

ばたんと、ドアを閉める。

「…忘れましょう。白昼夢。あれは白昼夢だったのです」

自分に言い聞かせる。悪夢を見ていたのだと。

あんなものを見たせいか、無性にお嬢様にお会いしたくなった。廊下の窓。よく磨かれたガラス越しに空を見て、お嬢様を想う。

「あああああああ!…!もっ!もっ!と激しくお願いします

!…!」

「…この豚が!豚の分際で、生意気よ!」

聞こえてきた、嘆願と罵声。

…癒しが欲しいです。切実に。

「ジョウトリーグよりウツギ博士へ…初心者用ポケモン三体、近日中にそちらへ届く、か…」

科学とは、便利だ。だが、危険もある。

「…待っていた…!」

そう、俺のようなやつに『悪用』される危険が…。

「あ。父さん、メールが来てるよ」

パソコンのデスクトップに表示された、『メールが来ています』の文字とアイコン。

「ん〜?ごめんヒビキ、ちょっと手が離せないから、読み上げてくれるかい?」

父さんは、ごそごそと引き出しの中をかき回していた。…いつも言ってるけど、ちゃんと整頓しようよ。

「うん。え〜と…差出人はジョウトリーグで、内容は…要請のあった初心者用ポケモン三体、近日中にそちらへ届きます。新たなポケモントレーナーの誕生に…ってええええ!?!」

僕はメールを読みかけて、叫んだ。

「うわあ!?!どうしたんだい、ヒビキ!?!」

驚く父さん。眼鏡がずれてるよ。

「…コトネちゃんに、知らせてくるよ!」

研究所を飛び出す。大好きなあの子の驚く顔を想像しながら。僕達、やっとならぬポケモントレーナーになれるんだよ!

大好き。大好き大好き大好き!

世界中で、ヒビキくんのことが一番好き!いつでも一緒にいたいのに、今日はお父さんであるウツギ博士のお手伝いがあるから、遊べないんだって…。

「はあ…会いたいよお…」

ファッション誌を放り投げて、ベッドに転がる。すると、

「コトネちゃん!」

ドアが開いて、ヒビキくんが来てくれた!

「ヒビキくん!?!…今日もかつこいいね!?!」

「わっ!?!」

感動したよ〜!会いたいと思ってたら、お手伝いほっぽりだしてヒビキくんの方から来てくれるんだもん!

嬉しくて抱きついたら、赤い顔してあわあわ言ってる…かわいい!

「コトネの思いが通じたんだね!ヒビキくん大好き〜!?!」

「コ、コトネちゃん…首、締まって、る…」

赤から青に変わっていくヒビキくんの顔色。ぱっと手を離すと、

苦しそうに咳き込んだ。

「ごめんごめん！大丈夫？」

訊くと、

「うん…大丈夫。優しいね、コトネちゃんは…」

喉を押さえて、笑うヒビキくん。

…王子様がいるよお！！かつこよくて優しくてかわいいなんて、完璧だよ！！

「優しいなんて…！ヒビキくんのほうがずっと優しいよ！」

「そ、そうかな…？」

照れて笑うヒビキくん…もう！

どれだけ私をときめかせれば気が済むの！？

私、実はポニーテール萌えなのです…冗談ですよ（後書き）

…ようやく！ライバルとウツギ博士とヒビキとコトネちゃんが出てきました！…メイドさん？ハハハ、ナンノコトデスカ？

「ラストさん、どうしてポニーテールに？」

「…お嬢様が、ご自分でできる髪型だからです。リアはツインテールがいいと言っていました。難しいでしょう？」

「…嘘だ！絶対嘘だ！ラストさんほんとはポニテ萌え…つにゃああああ！！！」

「ライチュウ！逃がしてはいけませんよ！」

「ライライラア！！！」

「お助けええええええええええ！！！」

お嬢様と、赤い髪の少年（前書き）

9話目とは…展開の遅さときたら！ウツギ博士に会ってすらいな  
いとは！言い訳は…無用ですね。付き合ってください方に感謝を！  
私見ですが、ジョウトのライバルはイケメンだと思います。ツン  
デレなところもたまりません。…最後の、研究所の助手から伝え聞  
いたあれには、くはあっ！となりました。…アニメで出なかったの  
が悔やまれます。シゲルは出たのになあ…。

## お嬢様と、赤い髪の少年

「レックウザ！もう一回お願い！」

背中のカノンが、頼んでくる。首を巡らせて見ると、子供のよう  
に楽しそうだった。

「…仕方ないな！振り落とされるなよ！？」

「うん！」

ぎゅっと、吾輩の背中に抱きつくカノン。

「雫もみ急降下からの急上昇！三回転付きだ！」

「きゃ〜！！！」

風を切り、急降下や急上昇を繰り返す。カノンが、喜んでいる。

旅に出て数分で、カノンの意外な一面を知った。吾輩の背中に乗  
って、飛行するのが楽しくてしょうがないらしい。

このような危険な飛行も、吾輩なら安心なのだそうだ。まあそう  
だろうな！

くっくくと、喉を震わせて笑う。カノンが、不思議そうな顔を  
している。

ラストが知ったら、どんな顔をするだろうな？

「…あ！レックウザ、あそこがワカバタウンよ」

タウンマップを手に、カノンが地上を指す。その先を見れば、タ  
ウンというにはシテイのような『ワカバタウン』。

今更ながらに、不安になってきた。吾輩はカノンの指示通り飛ん  
でいたが、あの島から出たことのないというカノンに、地理がわか  
るのか？

「…そうか、では降りよう」

降下する。大きな吾輩には狭いだろうと、民家のない砂浜に着陸  
する。

「おお！？お嬢ちゃん、見たことのないポケモンだな！」



海辺で釣りをしている男に、声をかけられた。吾輩は、認めていない人間に話しかけてやる気はないのだ。

そっぽを向いてやる。

「…愛想のないポケモンだなあ、お嬢ちゃん？」

笑って、男は失礼なことを言った。…カノン、がつんと言ってやれ！

「…レックウザ、気位が高くて…気を悪くしたならごめんなさい」  
吾輩の背中から下りて、カノンは頭を下げた。長い尾のような髪が揺れる。

「わわっ！？ちょよ、ちょっとお嬢ちゃん、そんな真面目に受け取らないですよ！？…って来た！」

カノンの反応に慌てた男は、どうやら食いついたらしい釣竿に意識を集中させる。

「…っおりゃあ！」

一気に引き上げる。釣れたのは…

「ん？これは…『みずのいし』か」

ポケモンじゃなかったと落胆する男。釣り針に引っかかった、美しい青い石を外す。

男の掌にすっぽりと収まっているその青い石を、カノンは見たいらしく、

「…見てもいい？」

男に近づいてそう訊いた。

「いいよいいよ！…っていうかあげちゃうよ！」

カノンに『みずのいし』を渡す男。…ほう、気前いいな。

「え？…でも、貴重なものなの？」

遠慮しようとするカノンに、

「いいのいいの！俺のニョロゾは、ニョロボンじゃなくてニョロトノに進化したいんだってさ！」

だからもらってよ！ヨシノシティに来た記念ってことで！

笑顔の男と、無表情なカノン。

その頬が引き攣っているように見えるのは、気のせいではないだろうな。

「まあ！マスターボールね、珍しいわ！」

決して大きな声ではなかったが、ジョーイの言葉は俺の耳に入ってきた。

…マスターボールだと？

預けたポケモンの回復を待っていた俺は、顔を上げる。カウンターの前に立っている女が目に入った。

女といっても、俺と同年代だろう。長い髪を明るい緑色のリボンで結んで、黒を基調としたワンピースと上着。シヨルダーバックは服と逆で、白が基調。

細い腰のベルトには、一つもボールがつけられていない。

…お願いします」

静かな声だった。俺は騒がしい女が大っ嫌いだが、この女は違うらしい。

「はい！少々お待ちくださいね！」

ジョーイの笑顔に頷いて、女は振り返った。

…ふん。美人じゃないか。

たとえていうなら、人形だ。作られたように整っていて、無表情さがますますそう思わせる。

肌は白いし、眼は翡翠色。かわいいというより、美人という形容が似合う女だった。

女は、ソファに座った。雑誌を読むでもなく、誰かと情報を交換するでもなく、ただ座っている。

…マスターボールか。どんなポケモンが入ってるんだろうな。

興味がある。マスターボールの、中身に。

初心者ポケモン三体いたたく前に、そのポケモンももらおうか。

「ねえキミ、どこ出身？」

「…出身？タンバシテイの近くの島よ」

女が、三人の男に絡まれていた。…明らかに、ナンパだ。

「トレーナーだよな？俺達とバトルしない？」

「今、ジョーイさんに預けているから…それに、あまり戦いたくないわ」

「すごいキレイだね」

「ありがとう」

ちやらちやらしている男が三人と、淡々と答える女が一人。

「待ってるの暇でしょ？俺達と遊ぼうよ」

男の一人が、女の肩に手をかけた。

「待っているから、遠慮するわ」

動じることなく、女は誘いを断る。

「…いいじゃん、行こうよ」

別の男が、女の手を引く。

女の細い眉が、ひそまれた。ゆったりとした動作で、手をはらう。

「…行かないわ」

囲まれているのに怯えもせず、女は言った。

「お高くとまってんじゃねえぞ！」

逆上した男に怒鳴られても、顔色一つ変えない。

…言っておくけど、俺は助けないからな。俺以外のやつらも、見て見ぬふりしてるぜ。

手元にポケモンはなし。どうするつもりなのか。

他のトレーナーは、目を逸らしている。女が目で救いを求めてきても、自分がそれに気付かないために。自分の『良心』とやらが、痛まないために。

…馬鹿馬鹿しい。それなら何で、今助けないんだ？

俺だけが、女を見ている。あの女がどうなるうが俺には関係ないし、痛む『良心』なんて持ち合わせてはいない。

無表情な女は、こちらを見はしなかった。かといって、男達を見ているわけでもない。宝石みたいな緑の目で、どこかを見ていた。

「いいから付き合えよ！ほら！」

「うるせえよ」

怒鳴り散らす男に、蹴りをお見舞いしてやる。そんなに力を込めたわけでもないのに、吹っ飛ぶ男。

「てめえ何しやがる！」

「うるせえって言ってるだろ」

二人目。腹に拳を叩きこんでやる。

「お、おい!？」

「しゃべんな」

気絶した仲間を見た男は、防御することもできずに顔面を蹴られて仲間入り。

…弱いな。集まって強くなった気になってるやつらは、見ているとイライラする。

「…ありがとう。助かったわ」

女が、礼を言ってきた。無感情な緑の目は、目つきの悪い俺を恐れることなく。

「助けたわけじゃない。勘違いするなよ」

突き放すように、俺は言う。面倒な関わり合いはごめんだ。

「…ならなぜ、この人達に関わったの？」

わずかな疑問を浮かべて、女が訊いてくる。

「…むかついたんだよ」

呻き声をあげて転がっている男どもを一瞥して、ポケモンセンター内にいるトレーナーどもも見る。

「こいつらも、見て見ぬふりしようとしていたぞいつらも」

目を逸らすトレーナーども。こいつらも、弱い。

「…そう。とにかく、助かったわ」

静かな女。…変な女だ。

「昼食、まだでしょう?一緒にさせてもらってもいい?」

お礼とってはなんだけど、ごちそうさせてと女は言う。

……おごりなら、いいだろう。

ヨシノシテイは、小さな町だ。田舎で、珍しいものなんて何もない。

「おい！危ないだろうが、しっかり前見てろ！」

しかし、女はふらふらと歩いて行ってしまふ。心なしか、翡翠の瞳を輝かせて。

危なっかしいこと、この上ない。…どうして、ポストを物珍しそうに見ているのか。

「ほら、早く行くぞ！」

この調子では、日が暮れる。女の白い手を引っ張って、俺は喫茶店へと向かった…。

食事は、会話もなく終わった。適当に入った喫茶店だったが、なかなかランチは美味かった。

よし、あとは人気のないところに連れ込んで、マスターボールのポケモンを…。

「デザートは？甘いもの、嫌い？」

頼まないのと、メニューを差し出してくる。

「…嫌いだ。俺はコーヒーでいい」

俺は甘いものが嫌いだ。あそこの席の、人目もはばからずにいちやついてるバカップルがつついている馬鹿でかいパフェなんて、絶対に食いたくない。

「旅に出たら、このお店のパフェも食べれなくなるね…」

なんだ、常連か？

「そうだね…二人でジョウト地方を巡って、帰ってきたらまた食べようよ！二人で！」

大事なことから、二回言ったぞあの彼氏。

「……っ！そうだね！…帰ったら、ここのパフェ食べて、教会に…！」

あの活発そうな女なら、あの真面目そうな彼氏を引き摺ってでも行きそうだな。

「コーヒーね」

ためらいがちに、女がウエートレスに声をかけ、注文する。…バカップルは、もう知らん。

「…お前、『お嬢様』だろ？まさか、一人で旅するつもりじゃないだろうな」

待っている間、気まぐれに訊いてみる。まったく音を立てずに、完璧な作法で食事をしていたこの女は、『お嬢様』だろう。そしてポケモンセンターでポケモンを回復させ、出身は遠方。所持しているポケモンは一体で、あの日常風景ですら珍しげに見ている様子。

マスターボールのポケモンは、飛行タイプだろう。おそらく、タンバからここまで飛んできた。この女が、交通機関を乗り継いでここまで来られるわけがない。

「ええ。見えないだろうけれど、お嬢様よ。今日、旅に出たの」

正直に、答える女。…こういうときは、嘔吐くもんだぜ。

「…無謀だな。恵まれてるお前が、何で旅に出るんだ？家で、お人形みたいに大人しくしてろよ」

相手が、金を持つてる『お嬢様』だろうが関係ない。俺は、おベっかは使わない。

箱入り娘のこの女に、この言い方はさぞきついだろうなと思ったら…

「…そうね。そうだろうけど…」

女は、微笑していた。うっすらとだが、確かに。

「世間を、人の感情を、自分を、知らないから…旅に出て、知ろうとしているの」

…『お嬢様』とは思えない『お嬢様』だな。危険な旅を自分で経験してまで、知りたいことがあるなんてな。

「さっそく、知ることができたわ。…あなたみたいな人、初めてよ」  
女が笑った。静かに、嬉しそうに。

「…何だよ。口と目つきが悪いってことか？」

一瞬、動悸がした。自分自身を誤魔化すように、憎まれ口をたた

く。

「悪い？…ううん、そうじゃなくてね…」

…何だ。早く言えよ。

「あ。自分に、正直な人、かな？」

そう思ったのと、真っ直ぐ俺を見てくる女。

…そんなこと言われたのは、『初めて』だ。

お嬢様と、赤い髪の少年（後書き）

ポケモンの小説を書くにあたり、考えさせられたことはたくさんあります。…食料事情どうなってる！？アニメで、ケンタロスが放牧させられていたシーンがあつたけど、まさか…！？とか、ポケモンセンターって税金だよね！？公共施設だよね！？とか、10歳で旅？ないない！いろいろ危険だよ！いろいろ！

深く考えてはいけない。ですが、考えてしまいます…。

…ねえサトシくん…ステーキとか、食べたくないかい？



番外編 くラストと仲間達く（前書き）

パソコンの調子が悪いので、故障ではないかと恐怖しているまどろみ猫です。混線だと思いたい、信じたい！

今回は番外編です。本編とは関係ありません。…悪ノリと、仕事  
が急に入ったのでカツとなってやらかしました。私の小説を書く時  
間を返せ！私の幸福の邪魔をするな！…という気分です（笑）

## 番外編　～ラスタと仲間達～

「…何の騒ぎですか、これは」

大広間。メイド達が忙しなく駆けまわり、パーティーでも開くつもりなのか、部屋を飾りつけている。

「リア、これは一体…っ!？」

指示を出しているリアに尋ねようとすると、彼女の右手が素早く動いて何か飛来してきた。

かんっ!

小気味いい音を立てて、大広間の壁にナイフが突き刺さる。

危ないし、壁に穴が!修繕が!

「心配ないですよ、ラスタさん。このお話は番外で、『何をしても何もなかったことにする』と、まどろみ猫が言っていました!」

「へ!?番外編!?何ですかそれ聞いていませんよ!？」

「だからっ!!今日は無礼講!!さあ皆でパーティーよ!!!Are you lady girl's!?!??」

ぴしゃあああんっ!と床を鞭打つカコ。…真昼間から、何て格好を!

「OK!!!ヤッハー!!!」

拳を突き上げるメイド達。…どうすればよいのか、このわけのわからないテンションを。

「…ラ、ラスタさん…!あの、あのっ!…まどろみ猫さんから、お手紙です…」

幼女のようなメイドが、おずおずと声をかけてきた。彼女が高名なポケモン医学者など、誰にわかるだろうか。

「…ああモモ。どこにあるのですか?」

あの猫め…歯ぎしりしながら、モモが指した先を見る。

「…リア…もつと普通に渡してくださいよ…」

手紙はさっき投げられたナイフで、壁に縫いとめられていた。ナ



威力が増幅し、火事になりかけた火を、カメックスが消す。

「室内ですよ！？いくら酔っているとはいえ、それくらいわかるでしょう！？」

逃げようとしたメイド二人の襟首を掴んで、お説教を始める。

「ごめんなさい、ラストさん……」

カメックスの噴射した水を浴びて酔いも覚めたのか、正座して反省を示す二人。

「気を付けてくださいよ？まったく……ほら、風邪を引く前に着替えきなさい」

「はい！」

失礼しますと会場を出ていく二人。

「お～お～……やさしくラストさん！」

「何ですかリア……飲み過ぎですよ」

からからと笑っているリア。

「ラストさん、私と新しい世界の扉を開きましょう！」

「遠慮します」

ボンテージ、といっただろうか？ぴったりとした黒の、かなり際どい衣装のカコが誘ってくる。……その手の鞭で何をするつもりなのかは、訊く気もしない。

「ラストさん」

どうぞと、モモがグラスを渡してきた。……よく冷えた、無色透明の……

「お水です……飲み過ぎは、よくありませんから」

……まともだ。まともな子がいる。

「ありがとう……」

喉が渴いていた。飲んでいると、

「……あの、言っているのかわかりませんが……みなさん、ラストさんのお疲れ会だって……まどろみ猫さんに頼んで、番外編用意してもらったんです……」

え？

「ラストさん、お休みなしで働いてるし…私達のことも、気遣ってくれるし…だから、普段お世話になってるお礼もこめて、パーティー開こうって…」

モモの視線は、会場に向けられている。

「驚かせようって、こっそり準備してたんですけど…ばれちゃったから、こうして…」

ただの番外編パーティーになっちゃいました。やっぱり、ラストさんに指示してもらえないと上手くいきませんね。

「そう、だったのですか…」

涙腺にきまずね…。こういうの。

「みなさん、ラストさんを困らせるつもりはないんです…わかってあげてくださいね」

笑顔で言うと、モモも会場へ戻っていく。

…旦那様。いい職場ですよ、ここは…。

モモの背中が、会場が、ぼんやりと滲んだ…。

「可愛い子がいっぱい！綺麗なお姉さまがいっぱい！ごちそうもいっぱい！天国ですなここは！」

立食式のパーティー。背が足りないそれは、ぴよんぴよんと跳び上がって欲しい料理をとっていく。

「な・に・を・しているのですか？」

首根っこを引っ掴むと、ぶらんと宙に浮く黒い体。三角の尖った耳、ふさふさとした尻尾。

「あれ、ラストさん。こんばんは〜！」

ピンク色の肉球がついた前足を振って、挨拶してくるそれ。

「こんばんは。何をしているのですかあなたは」

ゆさゆさと、左右に振る。首輪についた透明なプレートも、一緒に揺れる。

「にゃ！？…いや、タチバナさんが『ここは男の楽園だぜ』って言うから見に来たのですよ〜！」

庭師であるタチバナは…鞭を持ったカコに追い回されている。

「ほら！タチバナさん、すぐに気持ちよくなるわよ！」

「…やなことった！俺には、女房と子供がいるんだ！家族のためにも、目覚めてたまるかああああ！！」

必死で鞭をかくぐるタチバナ。楽園というより、地獄だろうに。周りは、助けることなく笑っている。頑張れ〜とか、もし目覚めても奥さんには黙っておくよとか、声援を送っている。

「皆さん、楽しんでるみたいで…ラストさんは？楽しくないですか？」

こうして話している間にも、その目は色を変えていく。明け方の空の色、深い海の色、燃え盛る火の色、くすんだ灰の色…。

「…楽しいですよ。たまには、こういうのも悪くありません」  
賑やかに、慰労もいい。

「そうですか。ならいいです」

私と同じ薄紫の瞳を細めて、それは笑う。

「…で？どの子が狙いですか？あのお姉さんとか？」

「逝ってらっしゃい、まどろみさん」

にやにやと笑うまどろみ猫を、カコの元へ投げ飛ばす。

「にやあああああああ！！??？」

え？作者にそんな真似してもいいのかって？

構いませんよ。…今夜は、無礼講です！

この（かなり変わってますが）素晴らしい仲間達と、これからも頑張っていきますよ！

番外編 くラストと仲間達く（後書き）

思いついたらすぐ執筆。それが悪ノリ。まどろみが登場したのも悪ノリだからです。：なんて便利な言葉でしょうか。

この番外編、はじめは「この小説の世界観をラストさんに説明してもらおう！」という至極まともな発想から生まれたのですが、メイドさん達が暴走しました。：なんていい職場だろうか。私を飼ってくれませんか？

人はその人の物語の主人公。メイドさん達にも、それぞれの物語があるのです。書いたら、長くなる！それだけが、確かなことではない！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4861z/>

---

ポケットモンスター ~お嬢様とレックウザ~

2011年12月29日16時52分発行